

通訳できなかったが、観客には映画界の重要人物がそこにいて、前例のない上映に立ち会ったことが伝わったと思う。後のお疲れ会では、次は映画界の本丸、パリのシネマテックに乗り込んで東映特集を組ませましよう、二人で野望を語り合った。

(国際日本文化研究センター教授)

センターの活動に関するエピソード

白 雲 飛

共同研究員として、二〇一六年四月一日より、国際日本文化研究センター共同研究「説話文学と歴史史料の間」(代表：倉本一宏教授)に参加し、二〇一九年三月末まで三年間、この研究会で研究・勉強させて頂きました。最初、私は留学生として、中国哲学・思想を専攻し、学んでいましたが、和漢比較の立場から、日本の平安末期から江戸時代までの歴史及び日本の中古・中世文学を視野に入れて考える必要があったため、この共同研究会に参加し、同時に期待もい

いておりました。

この研究会で学べたことは、私にとっては計り知れない大きなものであり、感謝の気持ちで一杯です。記憶に残っていることは多々ありますが、特に思い出深いエピソードをここに記しておきたいと思います。

一、実地調査の手法の学び

研究会の前後にあった実地調査は、大変参考になりました。研究会に参加する以前は、専ら文献だけで全てを判断し、研究しておりましたが、この研究会においては学んだことは、例えば歴史的な名勝の具体的な場所については、実際に足を運び、調査するということでした。倉本先生と古橋先生のご指導で、他の方々とともに現地へ赴き、例えば内裏や朱雀門の場所を確認したり、写真を撮ったり、資料を収集したりしました。歴史家の先生たちにとっては何となくも面白い活動でしょうが、これまで専ら文献を扱うのみであった私にとっては、実に新鮮で面白いことでした。ただ、実際にどういうところが役立つのかは、当時は分かりませんでした。後に、研究分担者として国内や海外で調査を行い、初めて実地調査の重要性を理解することが出来たのです。

一例として、二〇一九年十一月一日―十七日に、中国西安で「放生池」の調査を行いました。事前に「百度地図」にて「放生池」の場所を示す地図を準備して行ったのですが、それによると「放生池」の場所は「写真・西安銀行」の敷地内にあるはずだったのが、実際は「西安銀行」より南南西の方角、「西安大唐西市」の「金市広場」に位置する骨董市の中に移転していたことが分かりました。「放生池」の写真とそれを説明する銘文を付します。これらの写真と後文にある写真六は基盤研究A（一般）「日本における「生き物供養」―何でも供養」の連環的研究基盤の構築」課題番号・16H01760、（代表者：国文学研究資料館、相田満准教授）の研究分担者としての調査の一部であり、ここで表します。

もう一例として、二〇一九年八月二六―二九日に中国北京で行った動物供養の調査があります。依田賢太郎氏の研究論文「東アジアにおける動物慰霊碑をめぐる文化」〔『東海大学紀要・海―自然と文化』第一二巻第三号、二〇一四年、五三―五八頁〕の中で、中国の「動物供養碑」について触れられています。実際の写真がなかったため、それを求めるための調査でした。その際、論文の中では「中国医学科学院動物研究所」と記載されていたものが、現地では「中国医学科学



大唐西市
(同右)



写真：西安銀行
(2019.11.17. 撮影)



放生池の銘文
(同右)



大唐西市の放生池
(2019.11.17. 撮影)

院医学実験動物研究所」と名前が違ったため、あちこちで情報を知り、やっと実際の場所に辿り着けたというところがありました。

このように、現地に行っては驚き、実地調査の必要性を実感する出来事も度々あり、この研究会で学んだことは今も私の研究・調査の中に生かされているのです。

二、古橋信孝先生のアドバイス

研究会においては、日文研の学者・研究者のみならず、ゲストスピーカーも貴重な話をしてくださいました。ただ、専門外の私には、研究会で発表され、議論される内容に時々追いつけないことがありました。倉本先生の計らいによって、研究会の終了後、京都の由緒ある料亭で懇親会が開かれ、食事しながら先生方に質問し、さまざまなことを教えて頂くことができました。特に、古橋信孝先生には多くの質問を投げかけ、その都度、先生からは真摯なお答えを返して頂きました。懇親会は研究会の延長のようでもあり、分からない事柄や知りたいことについて質問できる勉強の場でもありました。特に質問の多い私に対して、古橋先生は嫌がらずにいろいろと日本の文学について教えてくださいました。ご自身の著

書も送ってくださり、日本語・日本文学を研究する上でのアドバイスもいただきました。研究手法の一つとして、まず先生方の著書を中国語に翻訳することが早道であると教えて頂いたのですが、そのことを聞いた私は、日本文学が専攻でない自分出来るかどうか悩みました。実際には二〇〇七年から時々先生方の論文を中国語に翻訳し、公表したりもしていましたが、一冊の本を丸々翻訳することはまだ決心がつかずにいたのです。そのような中で、二〇一九年八月二二―二五日に北京大学で開かれた国際会議のために先生方の論文を訳す機会があり、翻訳の面白さが分かり、急激に意欲が湧いてきたのです。これからは、論文翻訳だけでなく、専門書の翻訳も手掛けていきたいと思えます。

また、懇親会ではいろいろな京料理を味わい、京都の街並みにも徐々に興味を抱き始めることになりました。以前は、博士号を取ることに必死で、そのほかのことに目を向ける余裕がなく、京料理や街並みなど京都の文化にも関心がありませんでしたが、この研究会や懇親会のおかげで、それらに興味を持つようになって、さまざまな場所に足を運び、京都の歴史や文化に触れるにつれて、個人的な調査も増えていきました。

写真一〜五は「供養碑」に関する調査を行った時に訪問し



[写真三] 同右



[写真一]「金刀比羅神社」
(2018.6.10. 筆者)



[写真四] 同右



[写真二]「金刀比羅神社」
(2018.6.10. 筆者)



[写真五]
「木嶋坐天照御魂神社」
(2018.6.23.)

た京都府京丹後市峰山町泉一六五―二にある「金刀比羅神社」の「狛猫」「猫石」「猫の置物」「放生池」「亀」と、京都市右京区太秦森ヶ東町五〇番地にある「木嶋坐天照御魂神社」の「三本足の鳥居」です。ここでは地元の文化に触れ、信仰を示す珍しい品々を拝見することが出来ました。歴史書に記載があるかどうか、説話に出ているかどうかも調べていた私にとっては貴重な経験で、引き続き調査を行ってきたいという思いを強くしました。

ここ以外にも、名古屋、和歌山、長浜をはじめ、長野県、群馬県にも足を運び、調査を行いました。日本文化や歴史の教養に浅く、特に日本の近現代のことに詳しくない私にとっ
ては、なるべく日本の多くの場所に足を踏み入れて調査をすることが、さまざまな知識を取得する近道ではないかと思う
に至りました。その中には、貴重な出会いもありました。

（以下の写真は、すべて筆者によるものです。写真の掲載は、関係者及びご本人様のご許可を頂いており

ます。)

「写真六」は太平洋戦争後にグアムのジャングルの中で、ただ一人、二八年も生き残り、生還した旧日本兵の横井庄一氏の墓碑です。墓碑の前に「グアム島の小動物の霊」という「小動物供養塔」が建てられています。この供養塔の写真データを求められた時に、場所がなかなか見つからず、横井庄一記念館を訪ねて横井庄一氏の奥さま（写真七）にお目にかかり、ご親族の大鹿一八氏（津島市議会議員）（写真八）

それまで私は、横井庄一氏のこととは知りませんでした。

その日は、横井庄一記念館で奥さまと大鹿氏と、生命倫理や動物供養、空海和尚などについて熱く議論し、日没までの時間をともに過ごさせて頂きました。横井氏の奥さまは九〇歳をむかえ、私の書いた文章を楽しみにされているそうです。この文章が無事に掲載となれば、ぜひ奥さまに読んでいただきたいと思っています。



〔写真七〕 横井美保子氏
(2017.12.23. 愛知県名古屋市の、横井庄一記念館において筆者撮影)



〔写真六〕「横井庄一氏の墓碑」及び「グアム島の小動物の霊」の墓碑 (2017.12.23. 愛知県名古屋市の、横井庄一記念館において筆者撮影)



〔写真八〕 ご親族の大鹿一八氏

三、「漢字及び漢字文化を無くす」問題

研究会では、ベトナムにおいて中国の漢字及び漢字文化を一掃する政策が行われているということが話題になりました。これは大変デリケートな話題であり、中越の対立がこれほど険しくなっているとは思ってもよらず、辛い気持ちでおりました。その中で意見を求められると、お互いが傷つかないためにはどのようにコメントをすればよいかと考えて、かなり緊張しました。

モンゴル系中国人の私にとっては、辛い話題でした。憎悪によって文化や遺産を破壊する行為は一時的な現象かもしれませんが、その国々にとって良いことをもたらしているとは、私には判断出来ません。ただ、貴重な歴史資料となる漢字文化を抹殺することは、大変痛ましいことだと思っております。

平和主義者の私は、貴重な歴史を刻む文化財を破壊する前に、ぜひ一度、冷静に立ち止まって考えてほしいと思います。破壊行為からは何も生まれません。周知の事実であり、文化遺産を必要としている人々や、あるいは国にでも譲るか売るかするというのも一つの手かもしれません。この厳しい問題に直面しても、人々が研究者も含めて国の境界線を越えられないのは、如何にも無力で辛い現実です。

研究会では、国際問題や各国の政策も学び、今も昔も世界各地では貴重な歴史資料や文化を破壊する行為が繰り返されていることを思い知らされました。これは運命的なものなのか、私にはよくわかりません。歴史的な文化遺産は一旦破壊すると再生不能です。だからこそ、破壊行為を行う前に慎重になるべきだと思います。

憎悪は現実として存在するのは仕方ありませんが、それを超える人間の知性、智慧があるのではないのでしょうか。

以上が、この研究会において私が学んだことです。私は、これからもこの社会の成り行きを観察し、日本文化や歴史、日本文学を学び続けたいと思います。そしていつか、きつと役に立つ働きができる良いチャンスが訪れることを願っています。

(大阪府立大学客員研究員)

国際日本文化研究センター元共同研究員